

研究発表Ⅲ イメージのポリティクス

ヴァージニア・ウルフはなぜその写真にこだわるのか

片山 亜紀（獨協大学）



ヴァージニア・ウルフの『「三ギニー」』（一九三八年）は、イギリスが第二次世界大戦に傾斜していく中で書かれた戦争論で、二種類の写真が登場する。

一種類目の写真は、スペイン内戦で無差別攻撃の対象となり殺された大人たちと子どもたち、そして爆撃された家屋の写真である。ウルフは文章においてこれらの写真に繰り返し立ち返り、これらの悲惨な現実があるために、どうしても戦争を防ぐ手立てを考えねばならない、と述べる。しかしウルフはこれらの写真を言葉で記述するだけにとどめ、実際に掲載してはいないので、読者はこれらの写真への情緒的な反応を抑えつつ、ウルフの議論を追いかけることになる。

もう一種類の写真は、イギリスの男性たちの写真である。こちらはテキストの随所に実際にはさみこまれ、ウル

フの議論の例証となっている。計五枚のうち最初の二枚は、一九三七年のジョージ六世戴冠式に参列している老將軍の写真、そして同式典でトランペットを吹き鳴らす兵士たちの写真である。ウルフは具体的な人名や式典名は伏せたまま、軍服に注目するよう読者に促し、豪華な軍服には戦争の悲惨さを覆い隠す働きがあると言う。残り三枚は、戴冠式および学位授与式に参列した要人たちの写真で、その中には、ケンブリッジ大学総長、イギリス主席判事、イギリス国教会のカンタベリー大司教の姿がある。しかしウルフはやはり具体的な人名や役職名は伏せたまま、その「行進」の行き着く先には戦争があると言い、従来とは異なる学び方や働き方についてさまざまな提言をする。

最近の研究によれば、スペイン内戦の報道写真は、国際的な軍事支援を取りつけるためのプロパガンダとして、当時大いに政治利用されていた。ウルフは写真の出し方となり操作することで、そうしたプロパガンダとは一線を画しつつ、イギリスの男性たちのふるまいと戦争との目に見えにくいつながりを示唆して、戦争を防ぐ手立てを読者とともに考えようとしたのである。

獨協大学外国語学部英語学専攻教授。イースト・アングリア大学大学院修了、博士（英文学）。専門はイギリス小説、ジェンダー研究。翻訳にヴァージニア・ウルフ「自分ひとりの部屋」（平凡社、二〇一五年）、研究ノートに「トランスジェンダーの物語を学生と読む」（『獨協大学英語研究』第七十五号、二〇一四年）など。